

ワイルドと美術

河村 錠一郎

(一橋大学教授)

1877年、ロンドンに新しいギャラリーが開設された。ロイヤル・アカデミーに属さない優秀な画家たちを広く世間に知らせる目的で作られたのだが、開館記念展の招待作家に、バーン＝ジョーンズやフランスのモローなどと並んでホイッスラーがいた。ホイッスラーの出品は8点だったが、そのうちの一つ「黒と金のノクターン——落下する花火」はきわめて大胆な異色作だった。荒いタッチで一面が黒く塗りつぶされ、打上げ花火の落下する微かな光の点と線が黄金色のアクセントをつけている。大御所ラスキンがこれに猛烈な罵倒を浴びせた——「公衆の面前に絵具壺を投げただけで200ギニーも要求する痴れ者……」ホイッスラーはラスキンを名誉棄損で訴えた。世に名高い「ラスキン／ホイッスラー裁判」がこうして始まった。

「黒と金のノクターン」をどう評価するか——これは、いってみれば人の審美眼ないしは前衛性の度合をテストするようなものである。当時、ワイルドはまだオックスフォード大学の学生だったが、春休みを利用してギリシャ旅行をし、オックスフォードに戻り、そして、夏休みに郷里に帰る途次、ロンドンに立ち寄って新設ギャラリーのこの記念展を見た。ワイルドは果たしてホイッスラーの作品をどう見たかは興味あるところだが、このことは幸いワイルドの美術展レポート「グローヴナー・ギャラリー」に記されている。この文章はまだ無名のワイルドが、ロンドン中の話題になっているこの新しいギャラリーにおける第1回美術展を論評したもので、「ダブリン大学マガジン」に投稿し、その7月号に掲載された。これによると、青年ワイルドはバーン＝ジョーンズとワッツにことのほか心ひかれたことがわかる。前者ではとりわけ「ヴィーナスの鏡」と「魔法にかけられるマリン」に、後者では「愛と死」に最大級の讃辞を呈している。いずれも文学的な主題で、読み取りやすい絵だが、ワイルドの受容の仕方も相当に文学的というか、主題の理解と主題の表現力の評価で占められている。こういうところが、ホイッスラー理解の妨げになったであろうことは十分に察せられるといっただろう。なお、ワッツの「愛と死」を讃え、ミケランジェロの業績に比肩するといひ、システィーナの「天地創造」の中の「光と闇を分ける神」のすばらしさと並べて評価しているのは、ギリシャの帰路ローマに立ち寄っているのだから、システィーナのミケランジェロの傑作が脳裏に焼きついていたのである。たしかにワッツの「死」のまとう白っぽいローブはミケランジェロの神のまとう白いロー

ブを思わせる。だが、この二つの描く世界はもちろん、目指すところもまったく違うと私は思う。(ただし、ワッツを高く評価したワイルドの審美眼はさすがと思う。)スタナップの「愛と少女」も、その色彩のいささか派手派手しいところはさすがに批判しながらも、愛の神の美しさゆえにかなり高い評価を与えている。特に愛の神の「少年らしい美しさは北ヨーロッパにはない独特のものでギリシャ諸島にはよくある美しさである。かの地には今日でもプラトンの『カルミデス』に登場するような美少年が幾らもいる」と書いているあたりには、後年のダグラス卿との愛と破局を予測させるものがある。

さて、ホイッスラーについてはどうか。「闇の巨匠ホイッスラー氏の〈色彩のシンフォニー〉」のタイトルは絵の内容の理解にあまり役に立たないといった上で、「黒と金のノクターン」を取り上げてこう記している——

……(これは)黄金の雨のような花火を描いたもので、真黒な空に緑と赤の光が炸裂し、画面に見える二つの大きな黒いしみは、おそらく、「クレマーン遊園地」の塔と、花火を見物する群衆を表わしたものだだろう。……これらの絵は実際の花火が眼に見える間の時間だけ鑑賞する価値がたしかにある。つまり、せいぜいのところ15秒だ。

ホイッスラーは『十時の講義』で「あるがままに自然を受け取れとピアニストにいうことはピアニストにピアノの上に坐れというに等しい」といい、写実主義や芸術に善悪の価値表現を求めることを批判して唯美主義を主張した。「表層の美学」をやがて唱えることになるワイルド、やがてホイッスラーの親しい友人の一人となる(もっともその後疎遠になるが)ワイルドも、この時点ではまだその美学が未熟であったのか、それとも世紀末の前衛性は美術にこそあれ文学は、少くともイギリスに関しては、意外と保守的であったのか、一考に価する問題であろう。なお、ワイルドがイギリスのミケランジェロと讃えたワッツの作品が「ヴィクトリア朝の絵画」展(9月14日～10月17日、新宿・伊勢丹美術館)で12点展示される。代表作「希望」(テート美術館)も入っている。ワッツの本格的な紹介になるといってよかろう。バーン＝ジョーンズの作品も出品される。「ワイルドの時代のイギリス絵画」展という感じである。

